縄文人の環境適応

令和４年度かながわの遺跡展

神奈川文化プログラム
MAGCUL
マグカル
かながわ県民文化祭

神奈川県教育委員会　神奈川県立歴史博物館　相模原市教育委員会

ごあいさつ

現在、日本全国では年間8,000件以上、神奈川県内でも年間1,000件近くの発掘調査が行われており、数多くの発見と成果が蓄積されています。そうした成果を受けて、令和４年度のかながわの遺跡展は、縄文時代における環境の変化をテーマとしました。

縄文時代の社会や文化は、農耕開始以前の定住生活のあり方や精神文化が世界的にも高く評価されており、昨年には「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録されるなど、近年注目を浴びています。１万年以上続いた縄文時代には、地球規模の温暖化・寒冷化などの気候変動があり、縄文人を取り巻く自然環境はたびたび変化しました。いかにして縄文人が生存戦略として環境に適応する努力を続けてきたのか、当時の社会と文化を明らかにすることで、現代のわたしたちが直面する気候変動や自然災害についても考えるきっかけとなれば幸いです。

令和４年12月

神奈川県教育委員会
神奈川県立歴史博物館
相模原市教育委員会

目　次

はじめに.....1
１　繁栄の時代　－中期－.....2
コラム１　縄文人の“隠し場所”「デポ」....7
２　変わりゆく社会と文化　－後期－.....8
コラム２　中期から後期の環境変化.....14
コラム３　谷を渡る道 17
コラム４　遺跡に残る災害の痕跡.....22
３　継承と洗練　－晩期－.....23
相模原市企画展 津久井城跡と市民協働調査 ...29

例　言

本図録は、令和４年度 かながわの遺跡展『縄文人の環境適応』の展示図録で、相模原市企画展（相模原会場のみ）の展示内容についても一部収録しています。

本展覧会は、神奈川県教育委員会（埋蔵文化財センター）・神奈川県立歴史博物館・相模原市教育委員会の共同主催によるものです。

展示会場と会期は次のとおりです。

【横浜会場】　神奈川県立歴史博物館　　令和４年12月24日～令和５年１月29日
休館日：月曜日（1/9を除く）、12/27～１/４、１/10

【相模原会場】　相模原市立博物館　　令和５年２月７日～３月５日
休館日：月曜日、２月24日

本図録に掲載した出土品等の所蔵・保管先については、神奈川県教育委員会所蔵のものは省略しています。また、遺構名称等の表記については、原則として報告書等の記載に従っています。

本展の企画・図録作成は、神奈川県立歴史博物館（担当　桑山童奈）、相模原市立博物館（担当　長澤有史）の協力を得て、神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課中村町駐在事務所〔埋蔵文化財センター〕の児玉　優が行いました。また、相模原市企画展の企画・図録（29頁）の作成は、長澤有史が行いました。

協力機関・協力者（各五十音順、敬称略）

綾瀬市生涯学習課、江戸東京博物館江戸東京たてもの園、川崎市教育委員会、川崎市市民ミュージアム、川口市教育委員会、東京都北区教育委員会（北区飛鳥山博物館）、桐生市教育委員会、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター、公益財団法人かながわ考古学財団、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、座間市教育委員会、玉川大学教育博物館、東海大学、藤嶺学園 鵠沼高等学校、栃木県教育委員会、秦野市生涯学習課、平塚市教育委員会、平塚市博物館、藤沢市郷土歴史課、町田市教育委員会、三浦市文化スポーツ課

秋田かな子、阿部由紀洋、天野賢一、新井　悟、新井雅幸、五十嵐　睦、伊東はるか、井上奈々、宇都洋平、内田真一郎、大倉　潤、大塚健一、大塚惟子、小川岳人、亀田幸久、菅野和郎、桐原弘亘、金馬義郎、小林竜太、後藤貴之、佐柄雄斗、櫻井はるえ、佐藤有紗、坐古善光、新開基史、新宮崇弘、鈴木直人、鈴木保彦、竹尾　進、樋泉岳二、中川真人、中嶋　友、中嶋由紀子、中村耕作、中山悠那、野坂知広、花澤明優美、古屋紀之、橋口　豊、浜田晋介、山田仁和、横山諒人

はじめに

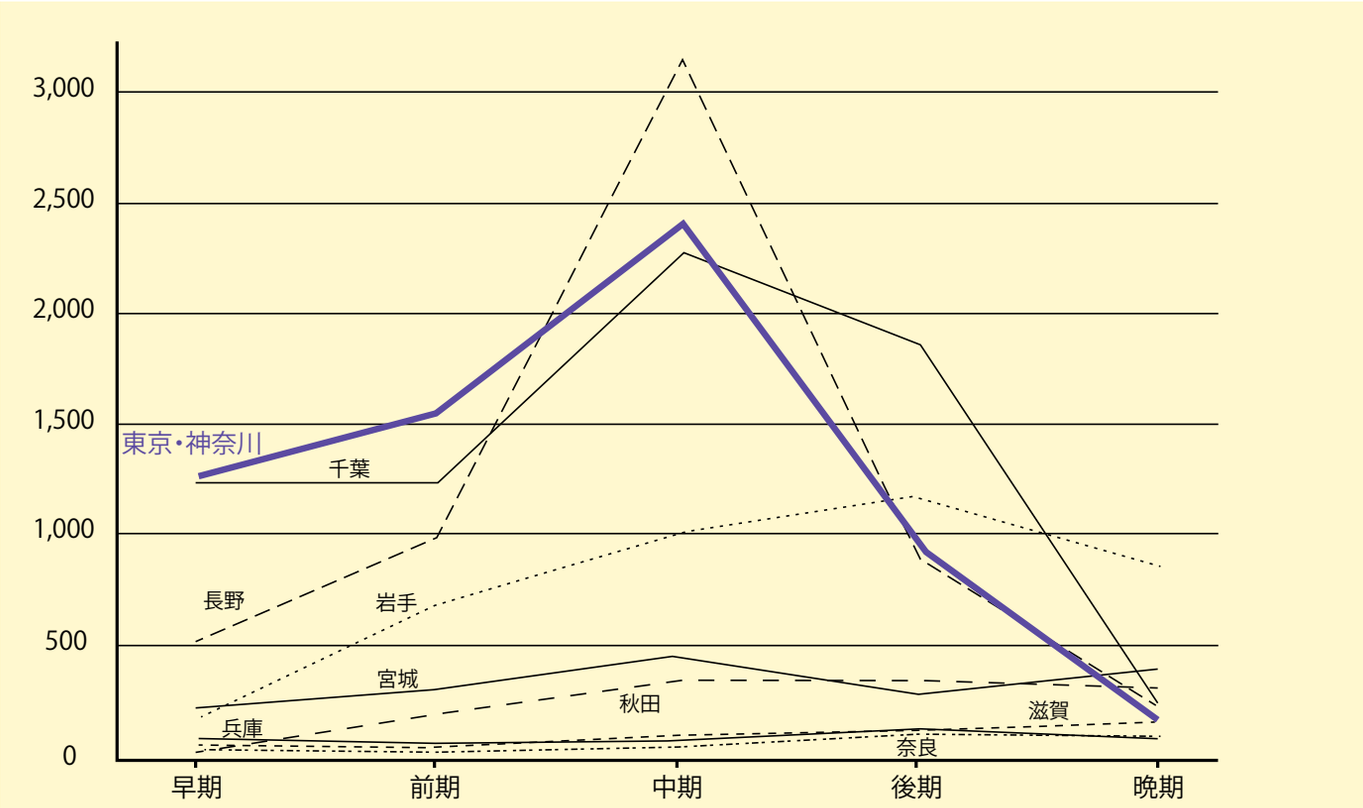
縄文時代は、人々が狩猟・漁労・採集を基盤とした定住生活を送っていた時代です。氷河期の終わりごろから、各地に稲作が伝播するまで１万年以上続きましたが、縄文人を取り巻く自然環境は一様ではありませんでした。地球規模の気候変動と海水準（かいすいじゅん）変動により、この時代の海域環境や植生環境は大きく変化したことがわかっています。

縄文時代の中期（約 5,400 ～ 4,500 年前）は、関東地方や中部地方を中心に遺跡数が最大となる時期ですが、その直後から後期（約 4,500 ～ 3,200 年前）・晩期（約 3,200 ～ 2,400 年前）にかけて、遺跡数は激減します。この原因の一つに考えられているのが、気候の寒冷化です。

氷河期が終了した後も、寒冷化による気温の低下と、急激な上昇による温暖化が複数回起こっていたことがわかっており、そのうち約 8,200 年前と約 4,300 年前の寒冷化については、地球規模のものであった可能性が考えられています。

大規模な集落を支えるには多くの食料資源が必要です。気候の変化によって得られる資源が限られてくると、それを効率的に得るため、集落は分散し、小規模化するようになります。このような厳しい自然環境の中で生き抜いた縄文人たちの社会と文化はどのようなものだったのでしょうか。

1　縄文時代の時期区分と年代（数字は概数）



2　時期・地域ごとの縄文時代遺跡数の推移

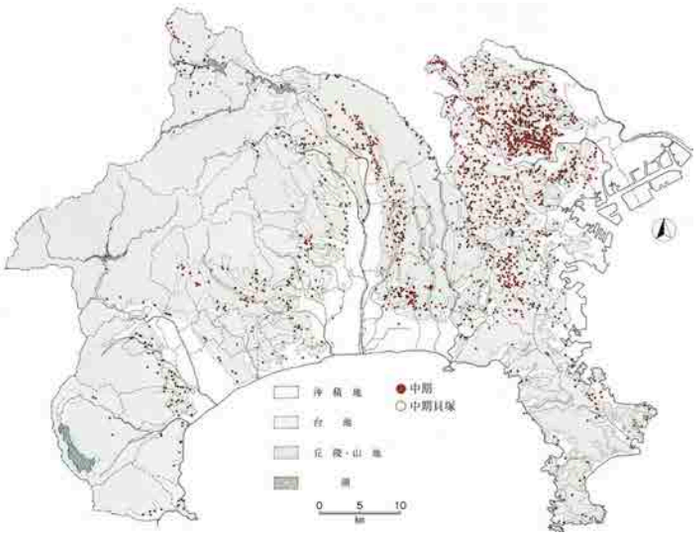
1 繁栄の時代 ー中期ー

▶大集落のくらし

縄文時代でもっとも集落が栄えた中期には、関東地方各地にも大規模な集落が登場します。発掘調査で見つかっている住居跡の数は、中期のものだけで縄文時代全体の約 70%にもなります。

この時期によく見られる集落に「環状集落（かんじょうしゅうらく）」と呼ばれるものがあります。集落の中央をまつりなどを行う広場や、墓などの葬送の場とし、その周りを取り囲むように住居がつくられています。建て替えなどを考えると、同時に存在していた住居は数軒から十数軒程度とみられますが、長期間にわたってその場所に住み続けた結果、数百軒を超えるような住居跡が見つかっている集落もあります。

相模原市中央区の山王平（さんのうだいら）遺跡は、境川沿いの相模野台地に形成された中期後半の環状集落です。発掘調査された範囲だけでも住居跡の数は 67 軒にのぼり、集落全体では 100 軒前後が存在するものと想定されています。



3　神奈川県内の中期の遺跡分布

4　中期の環状集落（山王平遺跡）

縄文人の食べた植物

中期の関東地方には、ドングリやクリなど食料となる木の実（種実（しゅじつ））をもたらす落葉広葉樹と、常緑広葉樹の林が広がっていました。これらの種実は、殻を取り除いたり、アク抜きを行うことで、食料資源として安定的な利用が期待できます。

落葉広葉樹には、常緑広葉樹に比べて食用に出来る種実が多く、得られる量も多いことから、縄文人は集落周辺の食用に適した落葉広葉樹を維持・管理し、常緑広葉樹林が広がるのを抑えていたと考えられています。

5　食用にしていた種実類

中期中葉から後葉の遺跡を中心に、関東地方ではクルミが多く利用されていました。クルミを模した土器や土製品が見つかっており、クルミが縄文人にとって身近なものだったことをうかがわせます。

6　クルミ形土器（相模原市中央区田名塩田遺跡群）
相模原市指定有形文化財
相模原市立博物館蔵

7　クルミ形土製品（勝坂遺跡）
相模原市立博物館蔵

（参考）クルミ形土器
（東京都町田市木曽中学校遺跡）
町田市教育委員会蔵

また、縄文人は種実のほかにも、さまざまな植物を食用にしていました。発掘調査では、それをうかがわせる出土品も見つかっています。

土器の製作時に粘土に混じった種子や昆虫がそのまま焼かれることで土器の表面に穴（圧痕）となって残ることがあります。

相模原市南区の勝坂遺跡から出土した土器には、70か所以上の小さな圧痕がついていました。この圧痕をシリコンで型取りし、電子顕微鏡で観察したところ、ダイズの野生種であるツルマメによるものであることがわかりました。数が多いことから、縄文人が意図的にツルマメを混ぜた可能性があります。ツルマメも食料資源のひとつだったとみられますが、土器に埋め込んだ理由はわかっていません。

8　ツルマメの圧痕をもつ土器（勝坂遺跡）
相模原市指定有形文化財・相模原市立博物館蔵

平塚市上ノ入Ｂ遺跡からは、ヒガンバナ科の植物であるキツネノカミソリ類の炭化球根が出土しています。

キツネノカミソリ類は球根に澱粉を含んでいますが、毒性のある成分も含んでいるため、アク抜きしないと食べることができません。

縄文人はこうした植物も、アク抜きをして食用としていた可能性があります。

9　キツネノカミソリ類の
炭化球根（上ノ入Ｂ遺跡）
平塚市博物館蔵

▶くらしを支えた道具

植物利用のための石器

縄文時代中期の遺跡では、種実などを食料資源として利用するための道具が多く見られます。長野県八ヶ岳山麓での状況を見ると、前期（約 7,000 ～ 5,400 年前）には石鏃（せきぞく）や掻器（そうき）などの狩猟活動に関係した石器が全体の 50％を占めるのに対し、中期には土を掘る道具であった打製石斧（だせいせきふ）や、石皿（いしざら）・磨石（すりいし）といった植物質食料を加工するための石器が全体の 80％を占めるようになります。この状況は神奈川県域でも同様であったと考えられ、狩猟よりも採集を主体とした生活へと変化したものとみられます。

10　中期の石器・石製品（相模原市緑区川尻中村（かわしりなかむら）遺跡）

中期の土器

中期後葉の神奈川県域では、関東地方南部の土器（加曽利（かそり）Ｅ式土器）と中部地方の土器（曽利（そり）式土器）が主体となり、両者の文様が合わさったような土器も多く認められます。

11　中期後葉の土器（左：川尻中村遺跡・右：横浜市鶴見区生麦八幡前（なまむぎはちまんまえ）遺跡）

尾崎遺跡

山北町の三保ダム建設に伴って発掘調査が行われたこの遺跡は、磨製石斧の製作を行っていた中期の集落です。

眼下を流れる河内川などの河原で採集した良質な凝灰岩を素材として、この地で製作された磨製石斧は、他の遺跡にも供給されたと考えられています。発掘調査では、磨製石斧の完成品の他、製作途中で破損して廃棄された300点以上の未成品が出土しており、その一部は神奈川県指定重要文化財となっています。

12　尾崎遺跡の発掘調査の状況

13　磨製石斧・未成品・石斧製作のための石器（尾崎遺跡）

中期の土偶

土偶は、縄文時代に作られた人形の土製品です。土偶の多くは女性を表現したものであり、安産や子孫繁栄、再生を願う儀式に使用されたとする説があります。

神奈川県内で出土している中期前半の土偶は多くありません。また、土偶をいくつか出土する集落と、全く出土しない集落とに分かれ、その分布に粗密が見られる傾向があります。

中期前半の土偶は、三角錐状の頭部に吊り上がった眼、水平な十字形の腕をもち、お尻が突き出たような「出尻形」と呼ばれる形態が特徴です。

14　土偶（相模原市南区下原遺跡）
相模原市立博物館蔵

横浜市栄区の公田ジョウロ塚から採集された土製の頭部片は、現存高17.7cm、横幅19.4cmあり、これまで発見されている顔面・頭部の中では最大級の大きさです。

首から下が失われているため、土器の縁に付いていた顔面把手か、土偶の頭部なのかはわかっていません。

15　土製頭部片（公田ジョウロ塚）
神奈川県立歴史博物館蔵

中期後半には、「バンザイ」をしているように腕を広げた土偶が登場しますが、中期前半の土偶と比べると、足が短小化し、腕や体、顔の表現も簡素化しています。

そこには、土偶が担っていた役割や期待が低下してしまったことが反映されているのかもしれません。

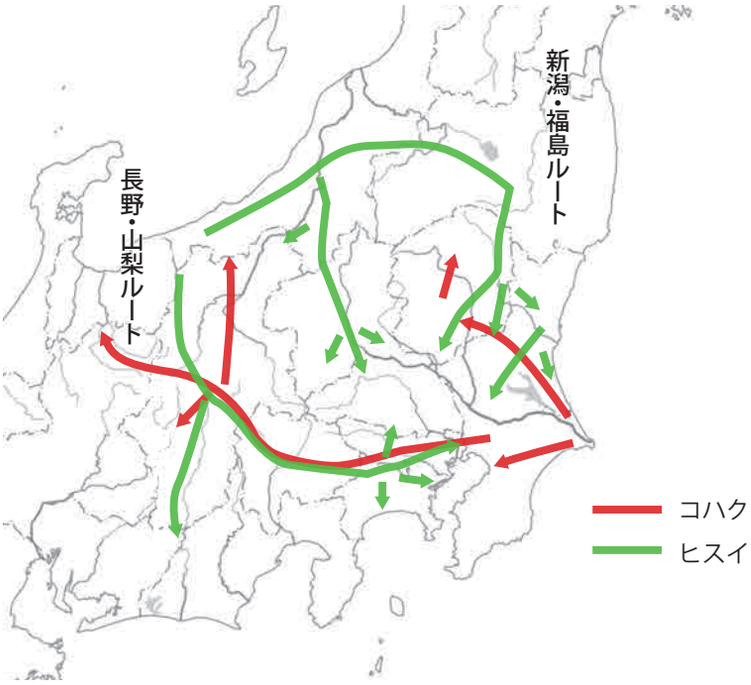
また、中期末から後期初頭にかけては、東北地方の一部を除き、土偶自体が姿を消してしまいますが、後期前葉になると再び全国で土偶が作られるようになります。

16 「バンザイ」土偶
（左：相模原市緑区橋本遺跡・相模原市指定有形文化財・相模原市立博物館蔵　右：川尻中村遺跡）

▶行き交う人々

縄文時代中期になると、装飾品としてヒスイやコハクを使用した大珠が盛んに作られました。関東地方では、環状集落の中央に位置する墓域から単体で出土することが多く、ムラ長のような立場の人物が装着していたと想定されています。これらの石材は遠隔地で産出するため、なかなか入手することのできない貴重品だったと考えられます。

関東地方近辺で見られる出土品の産出地は、ヒスイが新潟県糸魚川市周辺に、コハクが千葉県銚子市周辺に、それぞれ限定されます。そこから、出土した遺跡の分布をみることで、これらの石が運ばれたルートをたどることができます。例えばヒスイの場合、関東地方南部へは長野・山梨県域を通るルートが想定されています。距離から考えても、各遺跡から産出地まで石を直接採取しに行ったとは考えにくく、途中何度も交易を繰り返すことでもたらされたものでしょう。産出地と関東地方南部は、およそ300km離れていますが、交易のためのネットワークが構築されていたことがわかります。



17 ヒスイ・コハク搬入ルート

18 コハク製大珠（左・中）・ヒスイ製大珠（右）
（秦野市東開戸遺跡）
秦野市指定重要文化財・秦野市教育委員会蔵

19 ヒスイ製大珠
（藤沢市西富貝塚）藤沢市蔵

20 大珠形土製品
（川尻中村遺跡）

コラム１ 縄文人の“隠し場所”「デポ」

発掘調査では、石器の素材となる黒曜石や、丁寧に作られた石斧などが、まとまって埋められたような状態で出土することがあり、これをデポ（埋納遺構）と呼びます。縄文人が何らかの目的のため、意図的に埋めておいたもので、そのまま忘れ去られてしまったのか、取り出されることなく残されていたものです。

現代とは違って生活の大部分を自給自足でまかなっていた縄文時代であっても、遠く離れた場所からしか入手できないものや、作成するのに特殊な技術が必要となるものを手に入れるためには、交易に頼る必要がありました。

黒曜石も産出地の限られる貴重品なので、縄文人が交易などで得たものを埋めて、大切に保管していたものなのかもしれません。

21　黒曜石の集積（平塚市原口遺跡）

22　土器に収められていた黒曜石
（清川村北原（No.９）遺跡）

23　打製石斧の埋納状況
（相模原市緑区畑久保西遺跡）

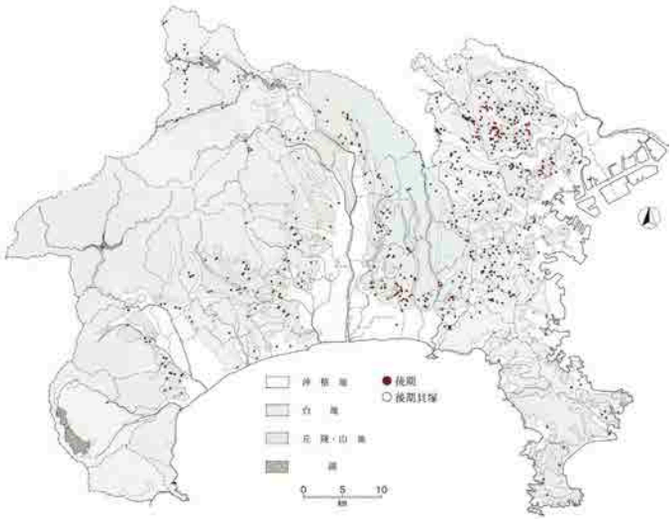
24　磨製石斧の埋納状況
（綾瀬市上土棚南遺跡）

2 変わりゆく社会と文化 ー後期ー

▶変わりゆく集落

縄文時代中期には各地で大規模な集落が営まれていましたが、中期末から後期初頭（約 4,500 年前ごろ）になると、住居の数が減少し、集落自体の規模が小さくなっていきます。また、今まで集落の営まれなかった場所にも新たにつくられるようになり、集落が分散していく状況が見られます。これは、気候の変化によって、大規模な集落を維持できるだけの食料資源を安定的に確保することが困難になったためと考えられています。後期前葉～中葉（約 4,300 ～ 3,400 年前）には一時的に大規模な集落がつくられるものの、後葉以降は再び減少に転じ、その傾向は晩期にも継続します。

一方で、祭祀（さいし）が盛んに行われていたことをうかがわせる遺構が多く発見されるのも、この時期の特徴の一つです。



25　神奈川県内の後期の遺跡分布

横浜市都筑区の神隠丸山（かみかくしまるやま）遺跡は、中期から後期を主体とする遺跡です。発掘調査では、この時期の住居跡が 142 軒見つかっています。

中期の大型環状集落に対し、後期の環状集落は小規模で、また少し位置をずらしてつくられています。

中期から後期へと移行する時期に、いったん集落が廃絶しているため、中期の環状集落の配置が後期の集落に引き継がれなかったと考えられています。

26　神隠丸山遺跡全景

27　神隠丸山遺跡全体図

柄鏡形敷石住居の登場と発達

集落の数や規模が縮小する中期末になると、関東・中部地方を中心に「柄鏡形敷石住居」が登場し、後期中葉まで、多くの遺跡で見られるようになります。

柄鏡形敷石住居は、その名のとおり住居の入口部が柄鏡のように張り出し、床に平たい石を敷きつめる点が特徴です。

28　柄鏡形敷石住居（横浜市青葉区稲ヶ原遺跡Ａ地点）

柄鏡形敷石住居は、中期後葉に竪穴住居の奥壁付近につくられた「石壇」・「石柱」と呼ばれる屋内祭祀施設が敷石に、住居の入口部分の埋甕が張出部に発達して成立したものと考えられています。

29　石壇・石柱をもつ竪穴住居（相模原市緑区大地開戸遺跡）

後期前葉には、集落の数がいったん増加する傾向をみせます。それに合わせるように、柄鏡形敷石住居も分布域を拡大するとともに、床全体ではなく部分的に石を敷いたり、埋甕をもたなくなるなどの変化が認められます。そして、住居の張出部から石の列が延び、そのまま住居の外側を囲むように置かれた「周堤礫」や「配石」、住居の内部に小石を方形に巡らせた「環礫方形配石」と呼ばれるものが現れ、床の石敷きも、炉から「凸」字状に敷かれる構造へと変化していきます。

環礫方形配石は、火を受けていることが指摘されており、周堤礫や環礫方形配石が住居の一部を構成していたものなのか、住居の廃絶時に何らかの意図で設置されたものかについては、意見が分かれます。

中期末～後期初頭	後期前葉	後期中葉以降
川尻中村遺跡	相模原市南区下溝鳩川遺跡	相模原市緑区青根馬渡No.4遺跡

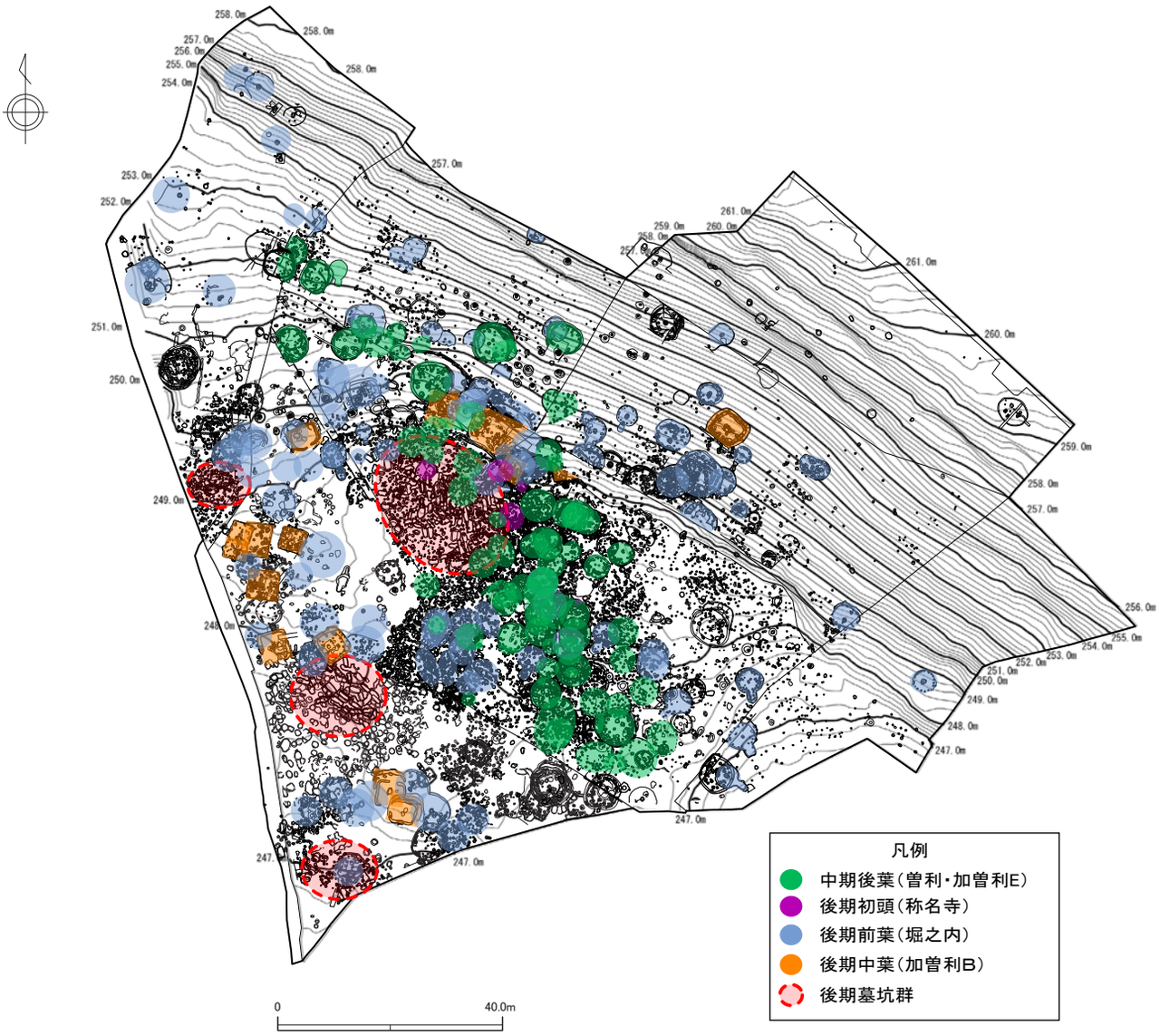
30　柄鏡形敷石住居の変遷

石の集落

相模原市・伊勢原市・秦野市・南足柄市といった山間地寄りの地域では、配石（はいせき）や敷石住居など、大量の石を用いた遺構が多く見られる集落が現れます。後期前葉では、石と墓との結びつきが強くなり、墓穴やその上に石を方形・円形に並べたり、立てたりした墓（配石墓（はいせきぼ））も登場します。

近年、発掘調査が実施された秦野市の稲荷木（いなりぎ）遺跡でも、おびただしい数の配石や敷石住居、配石墓が見つかり、後期の集落の特徴をよく示しています。

31　配石（相模原市緑区はじめ沢下（さわした）遺跡）



32　稲荷木遺跡の遺構分布

33　敷石住居と周堤礫、環礫方形配石（稲荷木遺跡）

34　敷石住居と配石（稲荷木遺跡）

35　配石墓（稲荷木遺跡）

36　配石墓（稲荷木遺跡）

核家屋（かくかおく）

後期前葉以降の集落の特徴として、集落の要となるような位置に「核家屋」と呼ばれる住居がつくられるようになります。

この住居跡を発掘調査すると、同じ場所で何度も建て替えを行ったことを示す無数の柱穴が見つかります。

核家屋の前面には、墓域が形成されている例も見られることから、墓地の維持・管理の役割を担い、祖先祭祀などを執り行う人々が住んでいた住居の可能性もあります。

37 「核家屋」住居跡（横浜市都筑区華蔵台（けしょうだい）遺跡）

後期の土器

後期初頭には、称名寺式土器が登場します。称名寺式土器は、中期の加曽利Ｅ式土器とは文様構成が異なり、西日本に分布していた中津式土器の影響を受けて成立しました。

横浜市青葉区の稲ヶ原遺跡から出土した西日本系の土器群は、関東地方で作られた加曽利Ｅ式土器と同じ粘土で製作されており、西日本から関東地方にやって来た人が作ったものと考えられています。

38　称名寺式土器（相模原市緑区青根馬渡No.２遺跡）

39　西日本系の土器群（稲ヶ原遺跡）
公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
（以下、横浜市埋文センター）蔵

後期前葉には、堀之内式土器が展開します。この頃から、浅鉢、大型の鉢、注口土器、土製蓋など、多様な器種が見られるようになります。また、文様が施され丁寧に作られた精製土器と、縄文を施文したのみの粗製土器に分化するのもこの時期の特徴です。

後期中葉では、加曽利Ｂ式土器が展開します。土器の器面は磨かれて光沢をもち、焼成時に炭素を吸着させる「燻べ焼き」と呼ばれる手法によって、上部が赤黒く、下部が橙色をしているものが見られます。また、多様な器種に共通の文様が施される特徴があります。

後期は祭祀に使われたとみられる特殊な遺物が発達する傾向にあり、土器にも日常で使われるものとは異なる形状のものが多く見られます。

40　堀之内式土器（横浜市南区稲荷山貝塚）

41　加曽利Ｂ式土器（相模原市緑区畑久保西遺跡ほか）

42　後期の特殊な土器
左：双口土器（藤沢市川名仲丸遺跡）
鵠沼高等学校蔵
中：異形台付土器
右：単孔壺
（平塚市王子ノ台遺跡）東海大学蔵

後期の土偶

中期末から後期初頭にかけては、一部の地域を除き、土偶が作られなくなりますが、後期前葉からは、再び多様な土偶が見られるようになります。神奈川県域で多く見られるのは、中部地方と関東地方の一部に分布する筒形土偶です。

筒形土偶は、筒状の胴部に平たい顔が斜めに貼り付けられ、頸には関東地方北部で盛行するハート形土偶の影響を受けたと考えられるアーチ状の把手がつきます。また、秦野市の菩提横手遺跡から出土した大型中空土偶は、筒形土偶に手足が付いたような珍しい形をしています。

43　筒形土偶（鎌倉市東正院遺跡）

44　筒形土偶（横浜市都筑区原出口遺跡）
横浜市歴史博物館蔵

45　筒形土偶（藤沢市向川名貝塚）
鵠沼高等学校蔵

46　板状土偶（藤沢市西富貝塚）藤沢市蔵

47　土偶出土状況（伊勢原市上粕屋・秋山遺跡）

48　大型中空土偶（菩提横手遺跡）

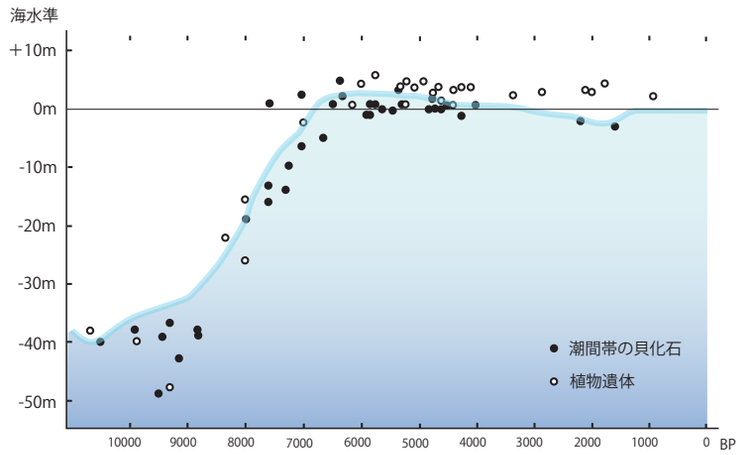
49　大型中空土偶（王子ノ台遺跡）東海大学蔵

コラム２ 中期から後期の環境変化

氷河期が終わりを迎えた約15,000年前以降、気候は温暖化していきます。その影響で、北アメリカやヨーロッパを覆っていた巨大な氷床が融(と)け、海面は上昇していきました。縄文時代前期の中ほどにあたる約6,000年前には、気温が現在よりも２℃ほど高く、海面上昇も最高位に達し、現在の海面よりも２～３ｍ高かったと考えられています。これが「縄文海進」と呼ばれる現象です。

ピークに至った海面上昇は、中期以降、徐々に低下（海退(かいたい)）に転じます。中期から後期前半にかけては、現在の海面よりも１ｍほど高い水準で推移し、後期後半から晩期にかけては、現在よりも２ｍほど低くなったことが分かっています。

また、氷河期が終わった後も、寒冷化とその後の急激な気温上昇現象（「ボンドイベント」と呼ばれます）が地球規模で何度か起こったことが知られており、中期から後期ごろに当たる約4,300年前にもボンドイベントが起こった可能性があります。

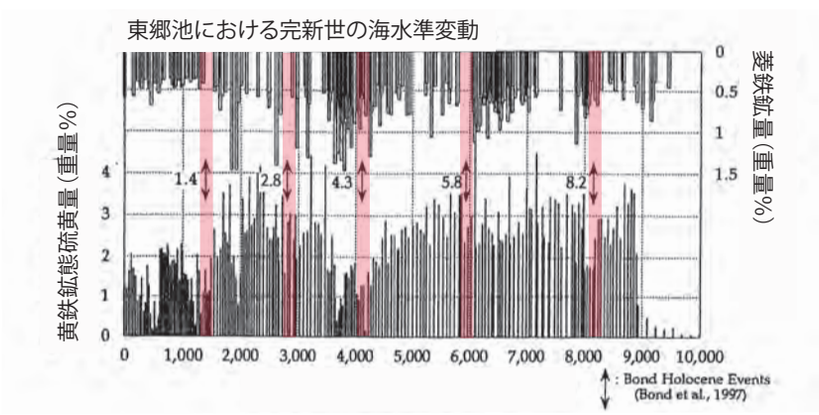


50　古奥東京湾地域における海水準変動曲線

地球規模の気候変動が日本列島にどのような影響を与えたのかを調査した研究があります。鳥取県にある東郷(とうごう)池は、海水と淡水の混じった汽水湖です。汽水湖は海面の上下によって流入する海水量が変化しますが、海水が多い時期と淡水が多い時期とで湖底の堆積物が異なるため、堆積物の内容を調べることで、海面の変動を推定することができます。

堆積物の調査結果からは、約4,300年前付近の層で淡水が多い時の堆積物（菱鉄鉱(りょうてっこう)）が増加していることから、海面の低下が生じており、気候が寒冷化していたことがわかります。

中期末から後期に当たるこの時期の気候変動は、当時の社会や文化に様々な影響を与えたと考えられます。



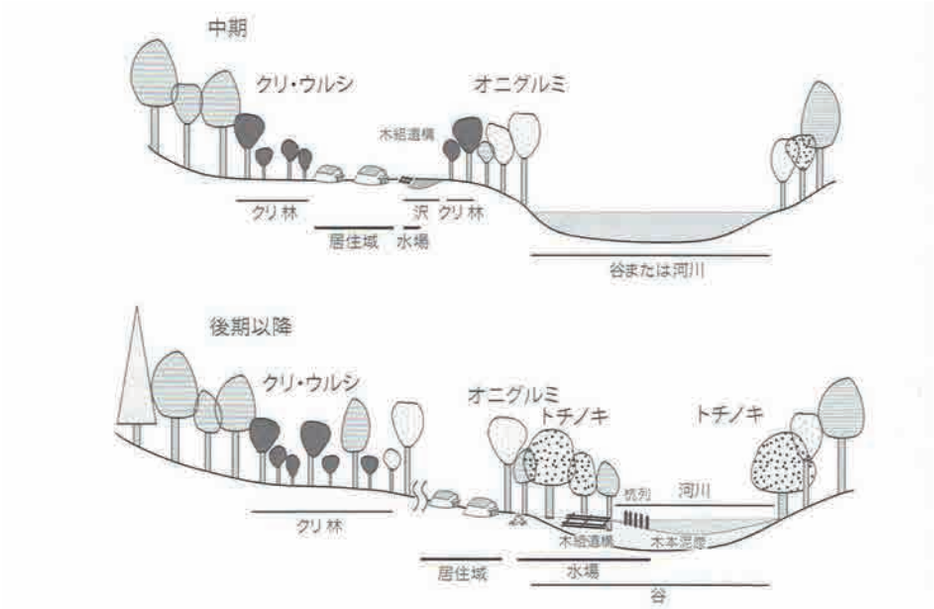
51　東郷池年縞堆積物中の変動

▶変わりゆくくらし

低地の利用

縄文時代後期以降になると、川を流れる水や湧(わ)き水を利用するため、川や谷の近くにも集落が現れます。川沿いの斜面地や谷底などの低地には、貯蔵用の穴を掘り込んだり、小石（礫(れき)）を敷いたり、木材を組み合わせたりした施設（水場(みずば)遺構）が構築されました。

水場遺構は、全国で 100 箇所以上確認されていますが、このうちのおよそ８割が後期から晩期（約 4,500 ～ 2,400 年前）のものです。この時期に水場遺構が増加する背景には、海退現象に伴って小規模な谷が増加したことがあります。海退によって生じた谷は、トチノキにとって良好な生育環境であり、縄文人はトチノキの実（トチの実）のアク抜き処理などのために、集落の近くの水場を積極的に利用していました。



52　関東地方における中期から後期にかけての低地の変化

平塚市の真田(さなだ)・北金目(きたかなめ)遺跡群では、後期の水場遺構が確認されています。

湧き水を利用した貯蔵穴や水さらしのための施設が見つかり、谷底では礫を長さ 60 m以上にわたって敷いた遺構が検出されました。これらは、水をうまく利用して植物質食料の保管やアク抜きなどを効率的に行うための施設と考えられています。

53　水場遺構（真田・北金目遺跡群）

54　水場遺構（礫敷き）（真田・北金目遺跡群）

礫敷きの遺構からは、土器・石器など5,000点以上が出土しているほか、土偶や祭祀遺物、木製品、動物骨、自然遺物なども確認されています。

近隣には、後期の集落である平塚市王子ノ台遺跡が所在していることから、この集落に住んでいた人々によって、水場遺構が管理されていたと考えられています。

55　土偶出土状況（真田・北金目遺跡群）

56　装飾品
（真田・北金目遺跡群）
平塚市教育委員会蔵

57　漆付土器
（真田・北金目遺跡群）
平塚市教育委員会蔵

伊勢原市の西富岡・向畑遺跡では、台地上から中期から後期にかけての集落が、埋没谷の中から水場遺構が確認されました。

水場遺構は、谷底の流路を挟んで配置された２列の木材の間を、板や礫で仕切った施設（木組遺構）を伴い、オニグルミやトチの実といった種実片や石斧の柄が出土しました。谷の中からは、ほかにも漆塗り土器や木製容器などが出土しています。

58　西富岡・向畑遺跡の遺構分布

59　埋没谷（右が北、西富岡・向畑遺跡）

60　水場遺構（西富岡・向畑遺跡）

61　石斧柄出土状況（西富岡・向畑遺跡）

62　漆塗り土器（西富岡・向畑遺跡）

コラム３ 谷を渡る道

横浜市都筑区の古梅谷（こうめやと）遺跡では、工事中に後期の木道が発見されました。台地を開析（かいせき）する谷の湿地を横断するように設けられていたものです。

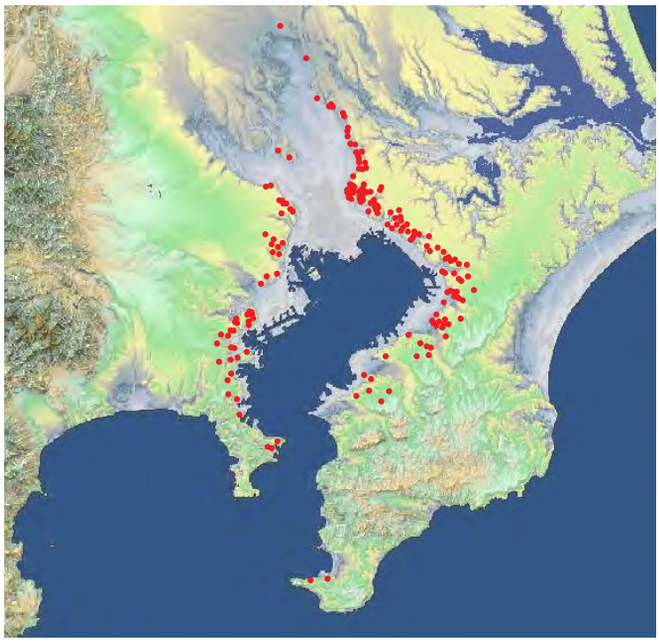
木道は、杭によって固定された枕木の上に、１本から複数の丸木（渡木（わたりぎ））をかけており、その上を道として渡る構造になっていました。

古梅谷遺跡の北側には、同じ時期の集落である西ノ谷（にしのやと）貝塚があり、当時の人々が谷を渡るために使ったものでしょう。

63　縄文時代の木道（古梅谷遺跡）

発達する漁労活動

縄文海進に伴う海面上昇時の海蝕作用で削られ、流出して海底に堆積した沿岸部の土砂は、その後の海退により陸地化し、海浜砂丘として発達します。また、海進時に削られた崖面には海蝕洞穴も形成され、海退により海面が低下したことで利用できるようになっていました。これらの砂丘や洞穴は、漁労活動などの拠点にもなりました。



64　後期の貝塚分布図

後期には、このような砂丘の発達とともに、沿岸部の各地で浅瀬化と干潟化の拡大がいっそう進んだことで、より人々が海の資源を利用しやすくなりました。これにより、人々が食べた貝の殻をはじめとする大量の「ゴミ」を捨てた場所である貝塚が増加します。神奈川県域である東京湾西岸地域では、横浜市金沢区の称名寺貝塚、同市南区の稲荷山貝塚など、直径 80 ～ 100 m程度の貝塚が形成されました。

貝塚からは、貝殻のほかに魚や鳥、哺乳類などの骨も出土しています。後期の貝塚の骨を分析すると、それまでは東京湾内外の近海魚が主体だった漁労の対象に、マグロやカツオのほか、イルカやクジラといった海獣類も加わっていることがわかります。

対象が広がるとともに、それを支える漁労具も多様化しました。称名寺貝塚や稲荷山貝塚からは、長さ 10cm を超えるような大型のモリやヤスが出土しています。

65　稲荷山貝塚第 1 地点 貝層全景

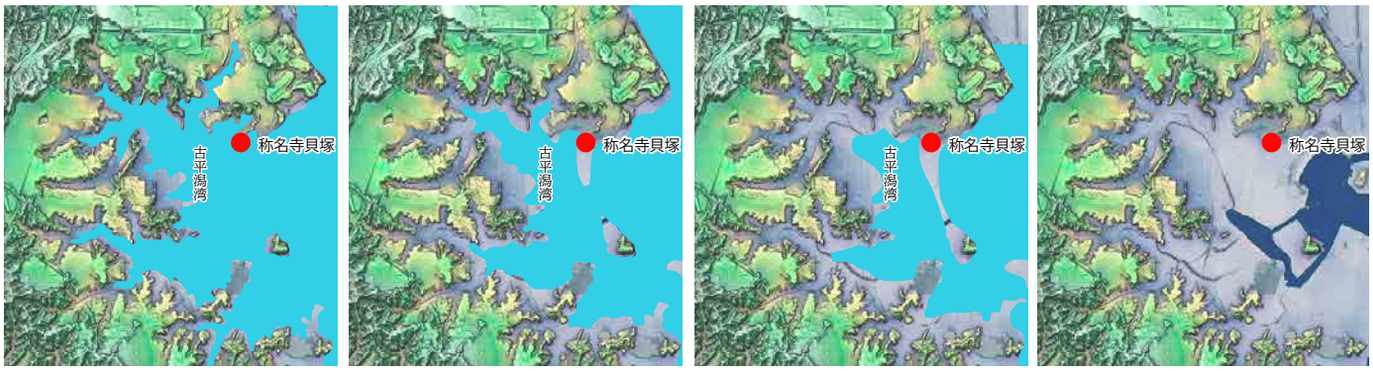
66　稲荷山貝塚第 1 地点 貝層断面

67　貝殻を埋納した土器
（稲荷山貝塚）

称名寺貝塚は、海浜砂丘上の微高地に形成された後期初頭から晩期にかけての貝塚です。

称名寺貝塚のある平潟湾周辺は、現在は完全に陸地化していますが、縄文海進時には、標高の低い土地に海水が流入し、奥の深い湾が広がっていました（古平潟湾）。中期末から後期にかけて、海退により海面が低下すると、古平潟湾も縮小し、湾口を閉じるように砂洲が発達します。称名寺貝塚は、この浜堤の付け根付近に位置しています。

称名寺貝塚では、これまで数回にわたって発掘調査が実施され、複数地点で貝塚が形成されていることが確認されています。



約6,500～5,500年前（縄文海進時）　約4,000～3,000年前（後期）　約2,500年前（晩期～弥生時代）　現在

68　称名寺貝塚周辺の地形の変遷

称名寺貝塚や稲荷山貝塚では、イルカの骨が多数出土しており、イルカ漁が盛んに行われていたことがわかります。イルカ漁には、突き漁と追込み漁があり、縄文時代にどちらの漁が行われていたのか、まだはっきりとはわかっていません。称名寺貝塚や稲荷山貝塚で出土した大型の鹿角製のモリは、湾内に迷い込んだイルカなどの大型海獣に用いられたものでしょうか。

称名寺貝塚などで出土したイルカ骨は、後期初頭から前葉に多く認められますが、後葉以降はシカやイノシシの比率が増えるようになります。

69　イルカ骨出土状況（称名寺D北貝塚）

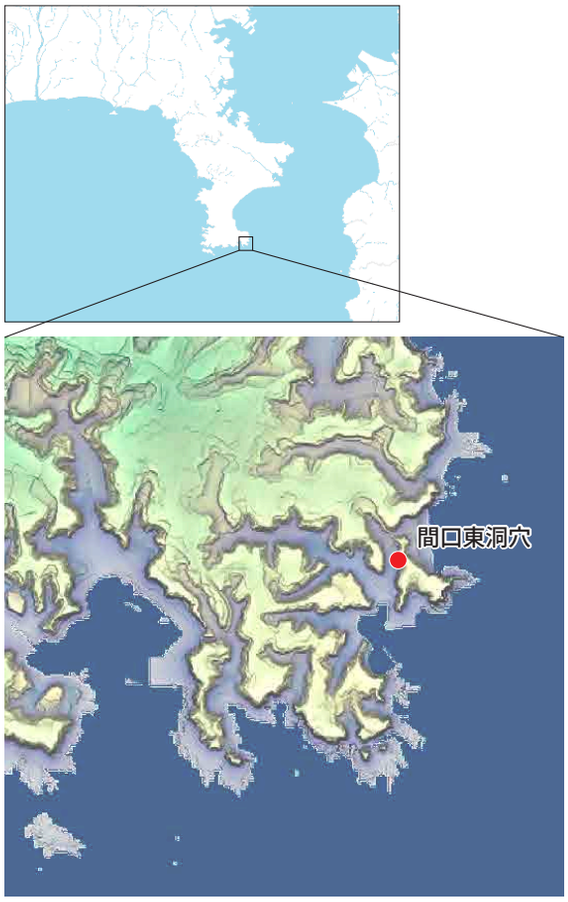
70　鹿角製漁労具(称名寺D貝塚)
横浜市埋文センター蔵

三浦市の間口東洞穴遺跡は三浦半島の先端付近、間口湾に近接する谷の内部に形成された海蝕洞穴を利用した遺跡です。縄文時代から近世まで、断続的に使用されていた遺跡で、縄文時代では後期に使用されたことがわかっています。

洞穴内から出土した貝類の多くは岩礁に生息するもので、火を焚いた跡や柱穴などの遺構も複数発見されています。一方で、石器はあまり出土しておらず、台石と凹石の２種類が数点出土したのみでした。これらの石器は洞穴を構成する凝灰岩を加工して作られたものです。

この遺跡は日常生活の場所ではなく、洞穴周辺で漁労を行っていた縄文人の活動拠点だったと考えられます。

東京湾内・湾外で活動していた縄文人は、砂丘や洞穴といった自然が形成した地形を巧みに利用し、海の資源を獲得していました。



71　間口東洞穴遺跡　位置図

72　間口東洞穴遺跡

73　第２号炉址と貝層断面（間口東洞穴遺跡）

74　鹿角製品・装飾品等（間口東洞穴遺跡）
三浦市蔵

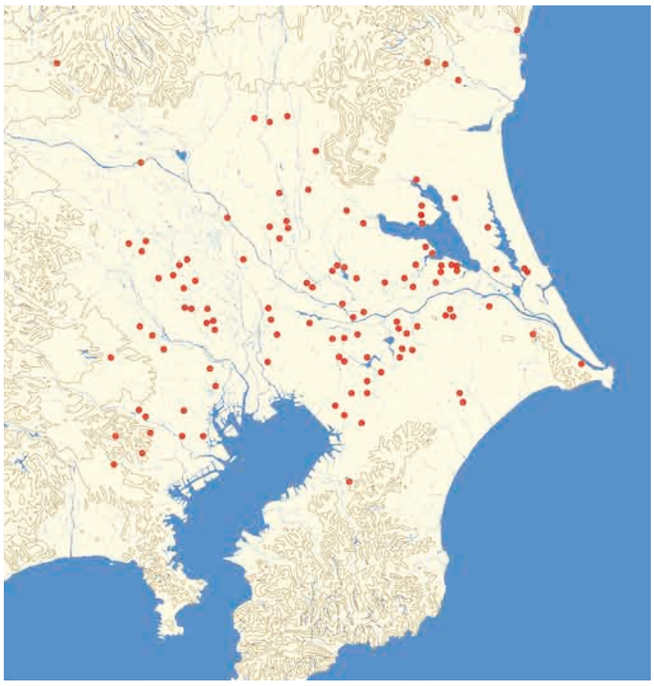
75　石器（間口東洞穴遺跡）
三浦市蔵

塩づくり

後期末以降の遺跡からは、薄手で文様がなく、表面がボロボロとはがれた土器が出土することがあります。これは塩を作るための専用の土器（製塩土器）と考えられるものです。

縄文時代には、乾燥させた海藻を焼いた「藻灰」を海水に混ぜたものを土器で加熱して煮詰めることで塩を作っていたと考えられており、製塩土器の表面がはがれているのは、煮詰める際に長時間にわたって熱を受けたためです。

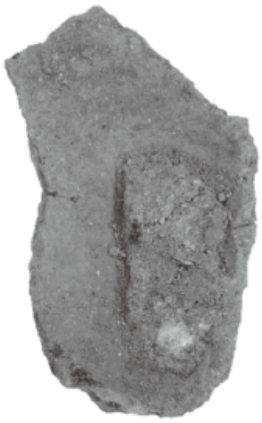
また、東京都北区にある西ヶ原貝塚から出土した後期後葉の土器の内側に付着した灰を分析した結果、海藻に付着していたとみられる微小生物の遺体の一部が見つかっていることから、製塩土器が現れる前の段階でも、同じように土器で煮詰める方法で塩を作っていたものとみられます。



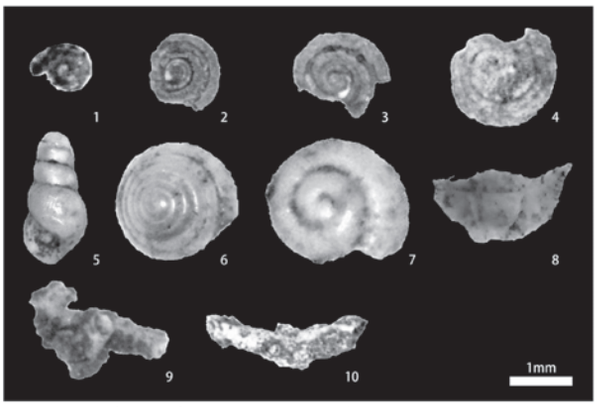
76　製塩土器の分布

77　製塩土器（華蔵台遺跡）

78　藻灰付着土器（西ヶ原貝塚）
北区飛鳥山博物館蔵



79　藻灰付着土器内面（西ヶ原貝塚）
北区飛鳥山博物館蔵



1～4：ウズマキゴカイ　5：キセルガイ類　6・7：キビガイ類
8：フジツボ　9～10：白色チューブ状の棲管

80　藻灰中から見つかった微小生物の遺体（西ヶ原貝塚）

コラム4 遺跡に残る災害の痕跡

発掘調査では、遺構や遺物といった人間の活動した痕跡のほかに、自然災害の痕跡が見つかることがあります。

伊勢原市西富岡・向畑遺跡の近年の発掘調査では、丘陵斜面の地滑(じすべ)りによって埋没した縄文時代晩期の森林の一部が発見されました。地滑りが発生した時期には、周辺に集落などは見られませんが、なぎ倒された何本もの樹木の他に、ササ類、昆虫遺体などが出土しており、当時の自然環境を知る上で重要な資料です。

81　晩期の埋没林(西富岡・向畑遺跡)

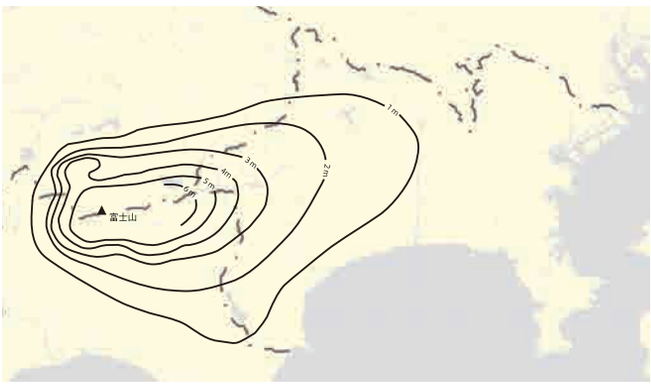
藤沢市の片瀬宮畑(かたせみやばたけ)遺跡では、晩期に起こった津波もしくは高潮(たかしお)の痕跡と考えられる堆積物が確認されています。

縄文時代の津波・高潮の痕跡が発掘調査で発見されるのは神奈川県内でも珍しいことです。

調査地点周辺は、後世の地震によって隆起していることがわかっており、この津波・高潮が発生した時と現在とでは、地形が異なるようです。

82　晩期の津波・高潮痕跡(片瀬宮畑遺跡)

神奈川県域で後期・晩期の遺跡数が減少した原因に、富士山の火山活動があったのではないかとも考えられています。実際に、この時期には火山活動が活発化していたことがわかっており、神奈川県域西部の遺跡を中心に富士山の火山灰が確認されています。



83　新期富士テフラの等厚線図

3 継承と洗練 ー晩期ー

▶集落と道具

縄文時代の晩期（約 3,200 ～ 2,400 年前）は、東北地方に分布する大洞式土器の成立をもって始まるとされています。大洞式土器は東北地方以外でも出土する例が多く見られ、関東地方の土器である安行式土器には大洞式土器の影響が見られます。

晩期の神奈川県域の様相を見ると、いくつかの集落が見つかっているのみで、その数少ない集落も大部分が晩期前半までには終焉を迎えたようです。

横浜市都筑区の華蔵台遺跡は後期から晩期中葉の遺跡で、中央部がすり鉢状に少しくぼんだ「中央窪地型集落」と呼ばれる、この時期に特徴的なタイプの集落です。

晩期の集落では、このような意図的に形成された窪地に加え、焼けた獣骨片が出土することも多く、ここで何らかの祭祀が行われていたと考えられています。

84　華蔵台遺跡

85　華蔵台遺跡の後期末～晩期の住居跡分布

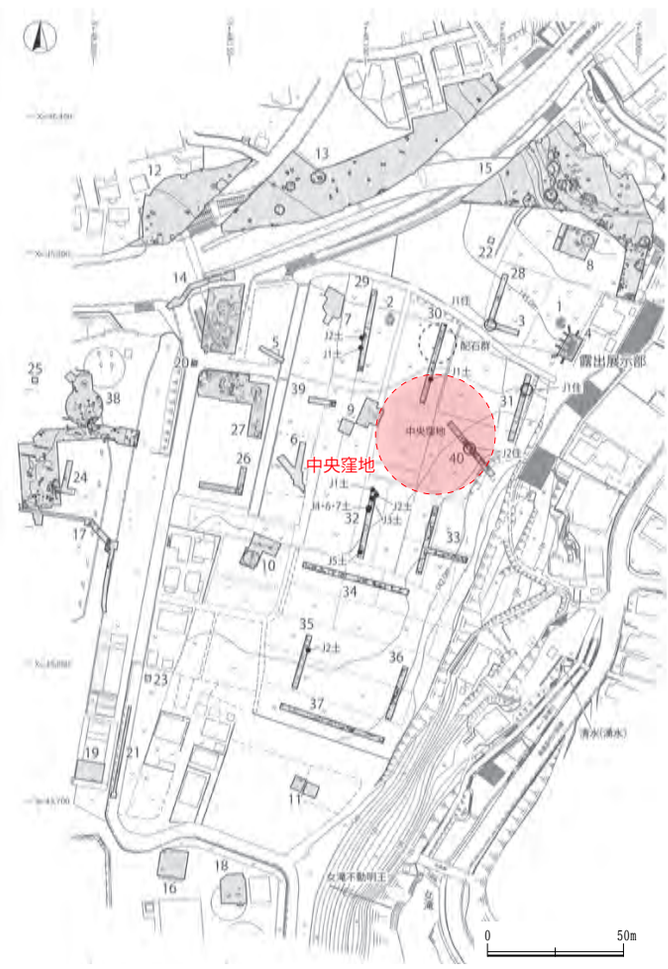
86　安行式土器（後期～晩期、華蔵台遺跡）
左写真の左端：横浜市埋文センター蔵・その他：横浜市歴史博物館蔵

87　東北地方を中心とした他地域の土器（華蔵台遺跡）
最奥：横浜市埋文センター蔵・その他：横浜市歴史博物館蔵

88　焼けた獣骨片（華蔵台遺跡）
横浜市歴史博物館蔵

相模原市緑区に所在する国史跡「川尻石器時代遺跡」は、中期から晩期にかけての集落です。

晩期の住居は、華蔵台遺跡と同様に中央部の窪地を囲むように配置され、中央窪地とその周辺から、土偶・石剣・石冠といった祭祀に関係するものや、土製耳飾などの装飾品が出土しています。



89　川尻石器時代遺跡の後期後半～晩期の遺構配置

90　中央窪地周辺から出土した祭祀遺物（川尻石器時代遺跡）
相模原市立博物館蔵

91　晩期の住居跡（川尻石器時代遺跡）

晩期には敷石住居はつくられなくなり、住居の形状も四角形を基調とし、４本の主柱穴と壁際に小柱穴をもつものへと変化します。川崎市多摩区下原遺跡の住居跡では、複数回の拡張を伴う３軒が重複している状況が確認されました。いずれの住居跡からも、土製耳飾や石鏃が多く出土しています。

92　晩期初頭の住居跡（町田市なすな原遺跡）

93　重複の著しい住居跡（下原遺跡）

晩期の道具

土製耳飾は、中期中葉から晩期中葉まで見られる、縄文時代を代表する装飾品のひとつです。

後期初頭から中葉にかけては、文様のない小型品で、ごく少数の人物のみが身に着けていたようですが、後期の後葉からは、装飾への関心が高まったのか、出土量が増え、文様やサイズが多様化します。サイズが多様化することについては、成長に応じて徐々に耳飾を大きいものに交換していったためと考えられます。この時期の土偶にも耳飾の表現が認められます。

94　土製耳飾（華蔵台遺跡）
横浜市歴史博物館蔵

95　土製耳飾
（相模原市緑区青山開戸遺跡）

96　耳飾り表現のある土偶（秦野市太岳院遺跡）
秦野市教育委員会蔵

東京都調布市の国史跡「下布田遺跡」から出土した晩期の土製耳飾は、国の重要文化財に指定されています。

表面は板状の薄い粘土を用いて形づくられた花弁を思わせるような装飾は、裏面から見ると、短い筒とドーナツ状の円盤の上に施されていることがわかります。

群馬県桐生市の千網谷戸遺跡では、下布田遺跡の土製耳飾と同じ寸法・装飾意匠をもつ土製耳飾が多数出土しています。このことから、千網谷戸遺跡で製作されたものが、下布田遺跡にもたらされたものと考えられており、当時の人々の交流・交易の一端をうかがい知ることができます。

97　土製耳飾（下布田遺跡）
国重要文化財・江戸東京たてもの園蔵

後期・晩期には、イノシシやシカを対象とした狩猟活動が盛んになり、それに伴って石鏃の出土量も増加します。石鏃の素材となる石材についても変化が認められ、中期以前には黒曜石製のものが多数を占めていましたが、チャートや頁岩などの集落の近くで採れる石材を利用して作られることが多くなります。

また、作りが粗く、大型のものが見られるようになるのもこの時期です。祭祀を行ったとみられる遺構や墓域からも大量に出土することから、儀礼などに使われていたと考えられています。

98　後期・晩期の石鏃（秦野市平沢同明遺跡）
秦野市教育委員会蔵

▶周辺地域のようす

縄文時代晩期には、神奈川県域だけでなく関東地方全体で遺跡数が減少します。その一方で、高度に発達した技術や精神性を示す遺跡も見られます。この時期の関東地方の代表的な遺跡を見てましょう。

東京都町田市に所在する田端遺跡からは、東西９ｍ×南北７ｍを測る後期後葉から晩期の前半にかけて使用された環状積石遺構が発見されました。環状積石遺構は後期中葉の土壙（墓穴）群の上部に構築されています。積石が墓の一部を壊していることや、墓に使われた石材を積石に転用していることなどから、積石遺構と墓とに直接の関係はないようですが、後の時期に墓域であることを認識したうえでつくられた祭祀に関係する施設であると考えられています。

99　環状積石遺構（田端遺跡）

栃木県小山市の国史跡「寺野東遺跡」は、浅い谷を挟んだ台地に形成されています。後期中葉以降、台地部分には土をドーナツ状に盛った「環状盛土遺構」が形成され、その規模は直径165 m、高さは２ｍにもなります。盛土部分に住居がつくられ、谷部には環状盛土に暮らす人々が維持・管理を行っていた水場遺構が形成されました。

100　環状盛土遺構（寺野東遺跡）

101　環状盛土遺構断面（寺野東遺跡）

埼玉県川口市に所在する赤山陣屋跡遺跡からは、晩期の水場遺構が発見されました。近隣の石神貝塚・猿貝貝塚などに暮らしていた人々の共同作業場として利用されていたようです。

発見された板囲状遺構などの木組遺構は、トチの実の加工や湧水地点の維持・管理を目的とした貯水施設であったと考えられています。

102　板囲状遺構（赤山陣屋跡遺跡）

103　トチの実加工場跡（赤山陣屋跡遺跡）

104　トチ殻の出土状況（赤山陣屋跡遺跡）

中期に大集落を営み、おおいに繁栄していた縄文人は、寒冷化による環境の変化にさらされました。集落は縮小・減少しましたが、それは縄文人が生活を環境に適応させた結果であり、技術や精神性はむしろ高度に発達したことで、次の時代へと社会や文化を変化させていったのです。

◆挿図・写真の出典

２:参考文献21より作成
３・25:神奈川県立埋蔵文化財センター 1990『神奈川県下における主要遺跡の分布とその問題点』かながわの考古学Ⅰより作成
10・30左:財団法人かながわ考古学財団 2002『川尻中村遺跡』/ 12:神奈川県教育委員会 1977『尾崎遺跡』
15:神奈川県教育委員会 2014『勝坂縄文展』/ 17:参考文献８より作成/ 21:財団法人かながわ考古学財団 2002『原口遺跡』Ⅲ
23:公益財団法人かながわ考古学財団 2014『畑久保西遺跡』/ 24:綾瀬市教育委員会 2008『上土棚南遺跡』/ 27・85:参考文献３より作成
29:財団法人かながわ考古学財団 1995『青野原バイパス関連遺跡』/ 30右:財団法人かながわ考古学財団 1999『道志導水路関連遺跡』
31:財団法人かながわ考古学財団 2009『はじめ沢下遺跡』/ 69:参考文献４
81:公益財団法人かながわ考古学財団 2021『令和３年度発掘調査成果発表会』/ 50:参考文献５より作成/ 51:参考文献25より作成
52:参考文献11/ 64:参考文献27及び『カシミール3D』を使用して作成/ 65～67:財団法人かながわ考古学財団 2002『稲荷山貝塚』
68:参考文献26及び『カシミール3D』を使用して作成/ 71:国土地理院『地理院地図vector』及び『カシミール3D』を使用して作成
72・73:松輪間口東海蝕洞穴遺跡調査団 1997『神奈川県三浦市松輪 間口東洞穴遺跡』
76:参考文献18及び国土地理院『地理院地図vector』を使用して作成
77:財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 2008『華蔵台遺跡』
79:阿部芳郎 2016「西ヶ原貝塚における藻灰入り土器の分析とその意義」『東京都北区西ヶ原貝塚』大成エンジニアリング株式会社を一部改変
83:町田　洋 1977『火山灰は語る』及び国土地理院『地理院地図vector』を使用して作成
89:相模原市教育委員会 2017『国指定史跡川尻石器時代遺跡総括報告書』より作成
95:財団法人かながわ考古学財団 1997『青山開戸遺跡』

◆挿図・写真の所蔵・提供元

３・４・６・７・８・14・25・30中・91:相模原市立博物館/ 参考・92:町田市教育委員会/ ９・42中・42右・49:平塚市博物館
18:秦野市教育委員会/ 19・42左・45・46・82:藤沢市(19・42左・45・46は中野萬年氏撮影)/ 24:綾瀬市
26・28・37・63・69・84:公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
32～36・47・58～62・81:公益財団法人かながわ考古学財団
39・44・86～88・94:横浜市歴史博物館
53～57:平塚市教育委員会/ 79・80:東京都北区教育委員会/ 93:川崎市教育委員会/ 97:江戸東京たてもの園
99:玉川大学教育博物館/ 100・101:栃木県教育委員会/ 102～104:川口市教育委員会

◆主要参考文献(発掘調査報告書及び関連県史・市町村史は原則として省略しました)

1 阿部芳郎 2022「総論 資源利用史としての製塩」『季刊考古学』別冊38 雄山閣
2 石井　寛 2009「居住システムの変化－関東後晩期」『縄文時代の考古学』8 同成社
3 石井　寛・中川二美 2008『縄文文化円熟－華蔵台遺跡と後・晩期社会－』横浜市歴史博物館
4 石井　寛・高橋　健他2017『称名寺貝塚－土器とイルカと縄文人』横浜市歴史博物館
5 遠藤邦彦他 1989「千葉県古流山湾周辺域における完新世の環境変遷史とその意義」『第四紀研究』28-2 日本第四紀学会
6 遠藤邦彦他 2022『縄文海進－海と陸の変遷と人々の適応』冨山房インターナショナル
7 工藤雄一郎 2012『旧石器・縄文時代の環境文化史』新泉社
8 栗島義明 2014「貴石利用からみた縄文社会」『季刊考古学』別冊21 雄山閣
9 栗島義明 2022「ヒスイ・コハク・貝」『縄文時代の環境への適応と資源利用』雄山閣
10 小林謙一 2019『縄紋時代の実年代講座』同成社
11 佐々木由香 2020「植物資源利用からみた縄文文化の多様性」『季刊考古学』別冊31 雄山閣
12 佐々木由香・能城修一 2019「植物資源利用から見た関東地方の縄文時代後・晩期の生業」『縄文文化の繁栄と衰退』先史文化研究の新展開Ⅰ 雄山閣
13 新開基史・新山保和 2022「西富岡・向畑遺跡の発掘調査-縄文時代晩期初頭の埋没林と後期集落の調査-」『日本考古学』55 日本考古学協会
14 杉山浩平 2020「３ 神奈川県」『富士山噴火の考古学』富士山考古学研究会
15 鈴木保彦 2014「晩氷期から後氷期における気候変動と縄文集落の盛衰」『縄文時代』25 縄文時代文化研究会
16 大工原豊・長田友也・建石徹編2020『縄文石器提要』ニューサイエンス社
17 高橋　健 2019「東京湾沿岸のイルカ漁」『考古学の地平－縄文時代中期の土器論と生業研究の新視点－』Ⅱ 六一書房
18 高橋　満 2007「土器製塩と供給」『縄文時代の考古学』同成社
19 谷口康浩 2019『入門 縄文時代の考古学』同成社
20 玉田芳英・庄田慎也 2013「三　縄文文化の停滞と変質」『講座日本の考古学』3 青木書店
21 勅使河原彰 2013「二　縄文文化の高揚(前・中期)」『講座日本の考古学』3 青木書店
22 樋泉岳二 1999「東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史」『国立歴史民俗博物館研究報告』81 国立歴史民俗博物館
23 中村耕作 2016「死者の身体と装い」『縄文時代の装い』神奈川県考古学会
24 福沢仁之 1998「氷河期以降の気候の年々変動を読む」『科学』68-4 岩波書店
25 福沢仁之・山田和芳・加藤めぐみ 1998「湖沼年縞およびレス－古土壌堆積物による地球環境変動の高精度復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』81 国立歴史民俗博物館
26 松島義章・川口徳治朗 1991「横浜南部,金沢八景瀬戸神社旧境内地内遺跡における自然貝層の14C年代とそれに関連する問題」『神奈川県立博物館研究報告(自然科学)』20 神奈川県立博物館
27 松田光太郎 2007「南西関東における縄文時代後期－貝塚にみる生業と社会」『縄紋時代の社会考古学』同成社
28 宮内慶介 2014「関東地方縄文時代後・晩期の集落と木組遺構」『季刊考古学』別冊21 雄山閣
29 安田喜憲 1980『環境考古学事始』日本放送出版協会
30 山本暉久 1991「縄文時代の集落」『神奈川県下における集落変遷の分析』かながわの考古学２ 神奈川県立埋蔵文化財センター
31 吉岡卓真 2019「水場遺構」『縄文文化の繁栄と衰退』先史文化研究の新展開Ⅰ 雄山閣
32 吉岡卓真 2019「後晩期の土製耳飾り」『身を飾る縄文人』先史文化研究の新展開２ 雄山閣
33 Bond,G.,Showers,W.,Cheseby,M.,Lotti,R.,Almasi,P.,deMenocal,P.,Priore,P.,Cullen,H.,Hajdas,I.and Bonani,G. 1997 "A Pervasive Millennial-scale Cycle in North Atlantic Holocene and Glacial Climates."science 278

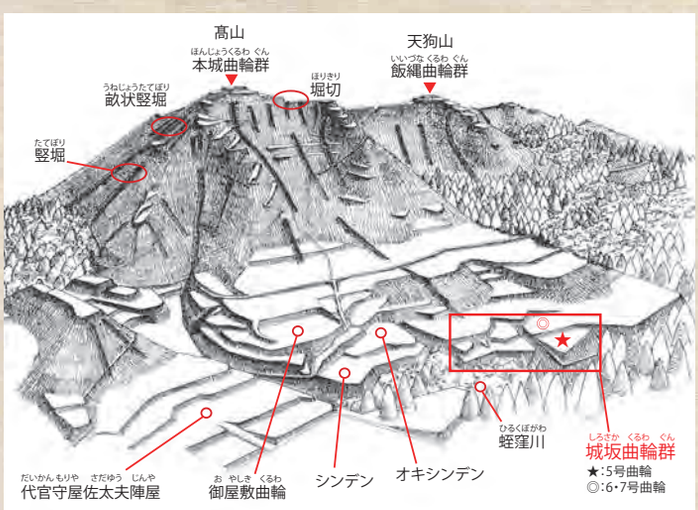
相模原市企画展

津久井城跡と市民協働調査

津久井城跡は相模原市緑区に位置する山城跡です。今から400～500年前の戦国時代、小田原北条氏に与した内藤氏が城主でした。北側に相模川が流れる城山（標高375m）に築城され、伝承では鎌倉時代の三浦氏の一族である津久井氏によるものとされています。津久井城はその歴史的価値を守り将来に伝えるため、県立津久井湖城山公園として整備されることとなり、1995年から城の価値を把握するために山頂の本城曲輪や南麓の御屋敷曲輪で継続的に発掘調査が行われてきました。その後、2010年から神奈川県公園協会・相模原市教育委員会文化財保護課・同市立博物館、さらにそれぞれのボランティアである市民調査員によって「津久井城市民調査グループ」を結成し、津久井城跡の歴史的な価値をさらに高めるために市民協働調査を実施しており、2022 年で 13 年目になります。

市民協働調査では城山の南麓部に位置し、７カ所の曲輪（平場）が確認されている「城坂曲輪群」を調査の対象とし、そのうち５号曲輪を 10 年かけて発掘調査しました。

津久井城の位置



津久井城の概要（守屋宏之氏作図に加筆）

発掘調査の結果、５号曲輪には池を伴う庭園が造られていたことがわかりました。その年代は16世紀後半ごろで、かわらけ、中国産磁器や国産陶器などが出土しました。池跡は入り江と岬を伴う形状であり、池底には石が敷き詰められていました。池を伴う庭園遺構は北条氏の城郭では小田原城、八王子城、鉢形城で確認されていますが、類例が少なく貴重なものです。

令和４年度は北東の上段に位置する７号曲輪について発掘調査を行い、その結果、７号曲輪は16世紀後半ごろに造られた可能性が高まりました。

津久井城市民調査グループでは発掘調査以外にも、知見を深めるために、月に１回津久井城に関連する講習会や見学会を実施しています。一緒に発掘調査を行い、一緒に考えることが津久井城市民協働調査の醍醐味です。津久井城に興味関心がある方は、ぜひ市民協働調査にご参加ください。皆様の参加をお待ちしています。

城坂曲輪群5号曲輪の調査区と遺構

令和４年度かながわの遺跡展　縄文人の環境適応

発行日　2022 年 12 月 24 日
編　集　神奈川県教育委員会教育局生涯学習部
文化遺産課　中村町駐在事務所（神奈川県埋蔵文化財センター）
〒232-0033　横浜市南区中村町三丁目 191-1
TEL　045-252-8661　FAX　045-252-8663

発　行　神奈川県教育委員会
印　刷　株式会社エスピーアール